



図書だより

令和2年11月
八尾高校図書館
22H 中島・岡田

11月になり、富山では新型コロナウイルスの話題も、ほとんど聞くことのないほど落ち着いてきました。しかし、恐ろしい病気は新型コロナウイルスだけではありません。それでは今回のテーマはこちら！

「病との闘い」特集

「最後の医者は桜を見上げて君を思う」

二宮敦人 TO ブックス

この作品は『最後の医者』シリーズの一作目。医療の進歩によって多くの病気が治るようになった。しかし、それでもどうしようもない病気は沢山ある。奇跡を信じて延命するか、死を受け入れて治療をやめるか。難病を前に、福原、桐子、音山の3人の医者が、それぞれの“善い医療”を模索し対立していく……。患者と、死と向き合う医者のお話。



「余命10年」

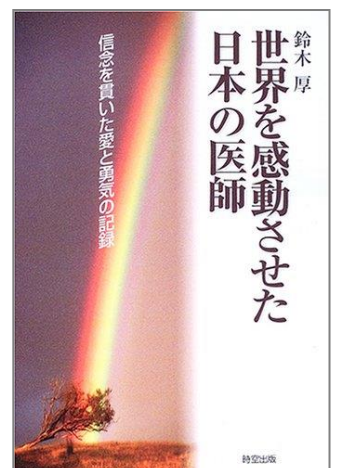
小坂流加 文芸社

「あと10年しか生きられないとしたら、あなたは何をしますか。」ごく普通の人生を歩んでいた主人公、高林茉莉。しかし、20歳の夏に、その平凡で単調な人生は一転する。「余命10年」。初めは気楽に考えていた主人公だが、発作が起こるたびにそれは恐怖へと変わっていく……。これは、短い余命を、それでも必死に生きようともがく主人公の、切なく儚い物語。

「世界を感動させた日本の医師—信念を貫いた愛と勇気の記録—」

鈴木厚 時空出版

この本は、4人の日本人医師を題材にした本です。世界的に有名な医師と言えば「野口英世」「北里柴三郎」を思い浮かべる人も多いと思いますが、この本では、現代人にはあまり知られていないが、信念を貫いた、世界に誇るべき日本の医師の話が紹介されています。富山の「イタイタイ病」の原因解明に人生を捧げた萩野昇をはじめとして、どの医師も患者を大切に思い、寄り添い、人間として誇り高い生き方をしています。ぜひ、読んでみてください。





「死をどう生きたか ー私の心に残る人びとー」

日野原 重明 中央公論新社

著者「日野原重明」が、主治医として看取とった18名の方の「死」について紹介している本です。看取った人々の真摯な姿を描きながら、「死」を受容することの意味について考えたものです。初出版からかなりの月日がたっているため、今の医療体制とは異なっていたり、時代の違いなども感じられますが、生きることについて考えさせられます。



新着図書紹介

一部紹介します！
図書館前にすべて
展示中！

アルルカンと道化師：池井戸潤

54字の物語 ZOO・怪・参・史・百物語：氏田雄介

ビブリア古書堂の事件手帖 I II：三上延

時事から学ぶ小論文第2号 科学編：朝日新聞出版



～医療・福祉の仕事に興味がある人必見～

実はすごい!! 「療法士(POST)」の仕事：POST 編集部

作業療法士の日 理学療法士の日 介護福祉士の日 救急救命士の日

保育士の日 助産師の日 社会福祉士の日 言語聴覚士の日

義肢装具士の日 「在宅医療」で働く人の日

